方向
第六六号　一九八七年五月一日　京都市上京区下長者町千本西入妙徳寺内　方向社

南山大師の戒律観（一）

赤谷明海

〈本論　第三章　第三節　四種宗要〉第三項　戒行と随行　附威儀

『事鈔』標宗顕徳編に、

「三言戒行者。既受得此戒。秉之在心。必須広修方便。検察身口威儀之行。克志尊崇高慕前聖。持心後起義順於前名為戒行。」（正・40・4・c）

とある如く、戒行とは発心乞戒して納受した戒体を※持し、三業の上に発動せしめる事であり、壇上の受体に対して受後の随行と言ひ、受は要期の思願、随はその思願の随順して動く行為を言ひ、受随両者の関係は極めて密接であり、

「若但有受無随。直是空願之院。不免蠹露之弊。若但有随無受此行或随生死。又是局狭不周。…必須受随相資方有所至。」（『事鈔』巻中・正・40・54・b）

の如く相資の関係にあり、一を欠いて他の全きを期する事は出来ない。従って戒行の高下清濁は既に納受の心相に依つて決定するとも言ふ事が出来、下凡の心に受ける戒体が小なれば、その心によつて行はれる随行も小である。されば南山は『業疏』に円教宗の戒体を明す中、

「由有本種熏心故力有常能牽後習起功用故於諸遍境能憶持能防隨心動用還熏本識如是展転能静妄源若不動察微縦妄心還熏本妄更増深重是故行人常思此行。」（続・64・430・左）

と言つて後習たる随行の大は心に熏ずる種子の大に依る事を認めてゐる。然し又ここに言ふ如く、種子に依つて生じた現行たる随行は常に種子に熏じて次いで起る随行の因となる故、壇上に於いて一度思願した大菩薩の要期が、そのままの形で恒に相続するものでない事は明かであり、ここに実際上戒行の困難さと重要さとがある訳である。そこで『事鈔』巻中には、

「受是縁助未有行功。必須因随対境防擬。」（正・40・54・b）

と言ひ、仮令義としては受随同価値であるとしても実際上生を招き果を感じるに望めては功に強弱あり、従つて一受以後尽形寿に亘り、大願の受心を随行によつて護るべきを誡め、更に

「若但有受無随行者。反為戒欺流入苦海。不如不受無戒可違。」（同前）

と徹底した良心的潔癖性を表明してゐる。

この随行の体性たるものは矢張り作・無作の二であり、それが受の作・無作と同異する点を南山は五同四異を以て説明するが、随行の要点は壇上に発得した受体を念々倍増して擁護光潔ならしめる事にあり、斯の如く常に防非止悪して受の種子に熏じ以て未来の善果を生ずるを戒肥と言ひ、戒の徳瓶を奉持し、聖迹に遵じて自ら守るならば、その身心清浄にして、

「四万二千福河恒流。」（『事鈔』巻中・正・40・53・c）

と言はれるのであるが、此に反して防善作悪すれば、戒体の功能衰損して聖行に違背し、善果を招来する事が不可能となるのであり、これを戒羸と言つてゐる。そこで戒をして羸瘦せしめる事なく肥碩せしめ、漸修漸成の善方便により、福徳たる無作を恒流せしめその無作の功能と自行の精進と相俟つて断悪修善饒益有情の仏行を成就する事が即ち戒行の眼目なのである。

次に戒行の一種たる威儀に就いて附言し、以て戒行の一般を推知する事としよう。威儀とは威ある儀容の意にして行住座臥語黙作々の一々が一定の方軌に合する事を言ひ、南山は『事鈔』主客篇に四威儀に就いて評説してゐるが、今はその威儀観の大体を窺つてみるに、元来律と儀とは合して律儀と言はれ、両者の間には互に通ずる点が多いが、『事鈔』巻中に、

「悪法禁善名之為律。楽殺前生行順此法。名之為儀。」（正・40・50・c）

とあり、此の場合は悪律悪儀を指すが、すべて律法により行動の上に現はれるのが儀であり、律と儀とは一往法と法の行相とに区別され、更に戒相に就いて言へば、七聚の中、戒分と威儀分とがあり、

「上三篇過相麁著。能治名戒也。下四過軽。能治之行名曰威儀。」（『事鈔』巻中・正・40・48・a）

とあつて、戒と威儀とに軽重の差を設け、軽罪を治罰するを威儀分と言ひ、南山は他の所で律法四種不同中に威儀戒を数へ、護根・定共・道共の三戒よりも劣弱と判ずるが、併し軽重の罪は常に相作用し、非威儀と雖も延いては重罪を犯ずるに及び、善威儀と雖も延いては大悪を禁ずるに至るものであり、特に威儀は外形に現れるが故に世人の崇仰畏敬の念に関係し、

「凡徒衆威儀事在厳整清潔。軌行可観。則生世善心。天龍叶賛。必形服濫惡。便毀辱仏法。」（『事鈔』巻上・正・40・23・a）

と仏法の隆替には威儀の影響するところ大きく、南山は正法久住の念願より、常に此の点を強調し、

「末法之中以威儀為僧。方助仏揚化。」（『事鈔』・正・40・24・a）

「縱使成受。形儀可観仏法住持。」（『事鈔』巻中・正・40・50・a）

と言つてゐる。而も形式を離れて内容はなく、『事鈔』巻下僧像篇に、

「敬則有儀。」（正・40・135・a）

と言ふ如く、礼敬の一事に就いても内心に淳厚の敬があれば必ず威儀庠序たらざるを得ない道理であり、されば

「夫成善有由。憑教相而心発。冥因顕果藉儀形而立宗。」（『事鈔』巻下・正・40・142・a-b）

と言はれ、更に徹底すれば、

「剃髪染衣戒体真旨。行来俯仰整斂威儀。」（『事鈔』巻下・正・40・153・a）

と言ひ得る訳である。斯の如く南山は威儀を単なる小行と見ず、その根拠を深く内心に求め、内心は必ず外相として威儀を仮るものであり、而も外相の清粛によつて精神を安んじ、以て僧業を進め、俗慮を廃して真慮に帰せしめ、それは更に世人をして善心を生ぜしめ、遂には慧日を光揚し、正法を久住ならしめる事であると信じてゐた。是は単に威儀のみではなく、行事作法等一切の戒行に関する彼の根本的信念であつた事であらう。

孤山雁信 —赤谷明海書翰集— （一〇）

原田憲雄編

☆1940.3.10. 原田憲雄宛。葉書。差出し名は洛西五位山人

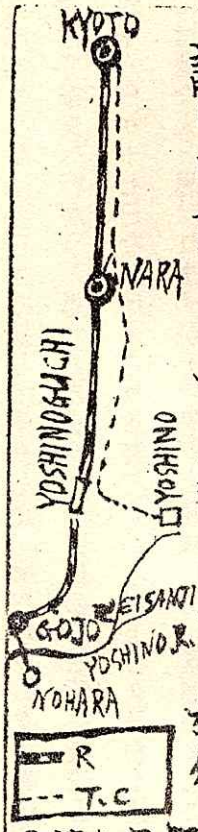
梅が余程綻びました、暇なれば御来寺下さい、但し主は明後日から留守です　例の日から風邪にやられ図々鼻をもてあましては今日まで過して来ました、まだウツムク仕事は出来さうにありませんがゴリオシで習字の法を片付けて奈良へ行かうと思つてゐます、十五日の御松明には帰る積りです、従つて大塚〈五郎〉先生宅の〈歌〉会が十六日か十七日なれば出られる筈です　〈川上喜久子の小説〉「滅亡の門」を読み了へました、著者は思想的には豊な人と思はれますがその思想を発表したい意慾のままに時や処や人などを無視したやうな表現法をとつてゐるのではないでせうか、あの数編中「滅亡の門」について特にかう思ひました、

☆1940.3. 下旬？〈日付、消印なし〉。同宛。葉書。墨書。六頁にコピーを掲げた。

☆1940.4.12. 同宛。葉書。

妙顕寺法会のため忙しい事だらう、一昨夜高田ところへ寄つて君の風邪の事を聞いた　御要心あれ、その帰へり君の〈堀辰雄小説集〉「燃ゆる頬」を借りて来た、萩の花のやうな短編を読んでゐると君のいつかの小説を想ひ出した、タネとは云はずとも影響してゐるところは多からう　正に君は茂尻阿仁（パロディアン）の名に恥じない　小生十四日は出られないがそれ以外は多分暇だと思ふ、留守の日ばかりよつて来ないで　たまにはゐる時に来まへ、今此方は椿の真盛り、それに木蘭も。桜は十四日頃が見頃、鳥（ニハトリではない）が急に増した、蕨が生えてゐる、雛菊もある、菓子はない、

珍らしく夜の机に向かと今までの隋勢で赤書庫書もおらず想いたゞ故郷の空にのみやう始末例によつてぶへミアンらしく赤字を生ず出した　まる四月上旬法會終了後の一日貴兄を誘つて吉野へ登りその夜五條町講南堂に一泊　翌朝櫻山寺更踏査　午後四時頃京都飯着（旅費、汽車電車賃三円五十銭　弁当代六十銭　計四円十銭也）の予定で南大和の春を探ろうと考へてみた　貴兄賛同せられるならば講南堂（清兄の寺）（変況してみる、如何



加藤も呼ばうと思ふ、家へ飯らずに五條で母に會わ積り。寺は遠慮の要らぬところ。

すばらしい好天、長い間読書から遠ざかつてゐたので　読書慾蓬勃として体内に満ちてゐますが　どうも胃の調子が悪く　はらへらしに　これから何処か郊外へ散歩にでかけようとしてゐるところです　多磨の事は正式に入会手続きをとりました、これから頑張つてやつてみます、では走り書きながら幸便によせて　如件

よく見ればもちの木蔭に梅
一輪やせかんぱちの木末に
寒く

発車すと発電機なりぬ我が
前の蒼き老爺の頬のゆさぶれ　ヨイ言葉ガナイ

☆1940.6.9.　同宛。手紙。
昨夜田中氏に紹介下された
事をうれしく思つてゐます
兼子氏の手紙　あれから帰
へれば来てゐました、早速
手に渡したいと思ふので
かく送附申します、今朝は

〈「田中氏」は、のち原田と結婚した田中千美。左京区松ケ崎桜木町二四に住み、岡田正三氏の古典道場の会員であった。このとし三月古典道場短歌会と水甕短歌会京都支社の瓶原合同吟行で知合った。六月八日、原田は赤谷君に伴われ画家北野正男氏を北白川に訪ねたが不在だったので、原田が勧めて田中宅を訪問し紹介した。以後共通の友人となり、千美が白血病で死ぬ一九五四年まで交際文通があった。その間の憲雄と千美に宛てた赤谷書翰の大部分は『幻の葡萄―原田千美遺文集録―』五巻（1982-3年）に収める。ここでは一部をのぞき、重複掲載を避け、日付と宛名のみ録存する。『多磨』は北原白秋の短歌雑誌。〉

☆1940.8.7. 同宛。手紙。墨書。封筒なし。

薬書拝見　去る五日には本山へ来られた由　切角約束してゐながら会へずに残念でした　小生は三日の日君の来訪を心待ちに楽しんでゐましたが見えなかつたので多分来られないのだらうと思つて寺の者に何も言ひ残さずにその夜帰洛しました　丁度四日は壬生で町内の慰霊祭があつたのです　薬師寺　東大寺　博物館等訪ねられたとの事　さぞ高い拝観料を取られたのだらうとお気の毒に思つてゐます　それにしても今度　奈良の印象をききたいものです

偖て多数の近作を御知らせ下され　ゆつくり拝見しました、中に墓あばきの処等　出所が判りませんが一首々々の意味はよく判りました　特に歌の出来不出来を問題外にして近頃の兄の心を占めてゐる問題を想像する時　何だか苦いものが自分の心へ入つて来ます　それは恋に関する複雑な兄の心情の反映でもなく　又複雑な中からも旺盛な生活意欲を汲み出してゐる　兄の態度より来る圧迫感でもなく　何と云ふか一種の条件反射で　女性とか

恋とか聞いたり心にかけたりするだけですぐ湧いて来る苦さです　これに就いては何時かゆつくり考へてみることにします　ところで三十首近い歌の中で〝「寒雲」の扉のところにはさまれてありし睫毛をとりてあはれむ〟が一番深い印象を与へました　これはその取材だけでも人の心にくひつく力を持つてゐます

最初堅苦しい文章で書き出したためにこれだけ書くのに呼吸がつまりさうです　今日はこれで失礼します

小生目下大ていは寺にゐます　お暇なれば御越し下さい　先は御返事まで　八月七日夕　法金剛院にて　明海

原田憲雄兄御座下

★1940.8.22.（消印 24.）同宛。葉書。

去る廿日畠山の老人（名は鶴松、赤谷明海『平安学園と私』73頁参照）機嫌よく帰郷しました、老人に餞別を下された由、感謝します。小生十八日夕頃野原から帰つて来ましたが下男の周旋の事、家も忙しくてうまく行つてゐませんでした、目下壬生へ通ひながら出来るだけ此方にゐる様にしてゐます、明後廿四日は当院の地蔵盆、それを片づけ次第山陰方面へ出て行きます、寺を此の様な現状のままに残して行くのは乱暴とは思ひますが　旅行は決行します、留守中防空演習もあるさうですがそれは何とかします。三十一日の早朝帰洛の予定です、その間兄に暇があれば時々見廻つて下さい

屋根の上に一本長く雑草の夕陽に映ゆる見つつわれをり

廿四日までに一度君に会ひたいと思ひましたが遂に出来さうにもないので右お便りまで。帰敬儀を通真記といふ釈書によつてやつてゐますが　なかなか文字にとらはれて奥が窺へません。匆々

★1940.12.14. 田中千美宛。手紙。墨書。『幻の葡萄』第一巻五五頁。

★1940.12.17. 原田宛。葉書。『幻の葡萄』第一巻五六頁。

★1941.4.16. 同宛。手紙。封筒のみ墨書。

前略　昨今のうちには来寺あるだらうと思つて置いてあつたが会へないので同封した。遅くなつてすまない。今日は学校へ出て赤松氏の宗教学概論を聴いた。長沢〈信寿〉よりは判りいい。心配してゐた華厳五教章は辛うじて通つてゐたので必修は三単位、教練を入れて月、水、木、土、の四日登校する事となつた。今晩は隣組の寄合ひ。身体具合は天気の都合か大分いい様だ。何時か又会はう。草々

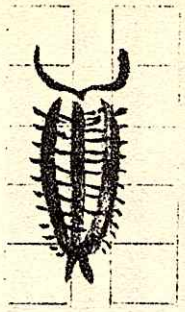
★1941.7.8. 同宛。手紙。封筒のみ墨書。

この様に細い神経をぴくぴくさしてゐる間があれば本堂の廊下でも雑巾がけしてゐる方がよほどましだと思つてはみたが日記を書く代りにここにくどくどしい文を記すこととした。

昨日あれから博物館へ行つて他に誰一人ゐない静な館内で数時間自分だけの時をすごしてゐた、この数時間自分の時を持つたと云ふ事がどうやら日頃の※雑物を落として本然の自分の姿にかへる縁となつたのだらう、本然の自分らしさ、それはたまらなく淋しい気持に満ちたものだ、これが出て来ると全く自分から社交性を押しやつてしまふ、人と話すことが出来ないのだ、特に二人だけでは。

日頃これに気づいてゐる自分は出来るだけ多人数の陰に本当の自分をかくして※舌を弄してゐたのだつたが　昨日は恐るべき二人だけの機会にめぐり合つてしまつた。

少なくとも二年程前までは自分にも二人だけの親しい会話をする力があつた、然しその後と云ふもの環境が自分を変へたのか　自分の本心が自ら退いたのか知らないが　二人で話すのに堪へられなくなつてしまつた。
昨日電車の中で皆俺の顔を凝視してゐる、眼を落せば落すだけ余計に図々しく俺をみつめてゐる、俺はそれをにらみかへすだけの元気もなく　電車の遅いのをいらいらしながら辛抱してゐた　これはあきれた程弱々しいおひな様のやうだが　俺には時としてこの様なことがおきる。その様な時には世界中に自分をいれてくれるところがない様に誇張して怖れてゐる、
偖て以上は全く俺自身のための日記だが　これから君に関係がある。
田中千美氏から手紙が来て原田様から聞いたのですが壺を下さるさうですが戴いていいのやら悪いのやら知りませんが兎に角近いうちに寄せて戴きたいと思ひますから都合のいい時を知らせてくれとの事。壺は昨日云つた様にまだ出来てゐない　だから来てくれたつて仕方がない、いづれ出来上れば君のところへ持つて行くから届けてくれ。実のところあの〃歩道〃〈佐藤佐太郎歌集〉に対する返礼としては余りにもみすぼらしい壺なのだが　何れ足らない分は何とか考へる。田中氏の手紙を読んでゐると本堂の棟の鬼瓦のところに鴉が二匹とまつてしきりに変な声を立ててゐた、おまけに次の様な虫が机に置いた手紙の上に這ひ上つて来た。全く小さい虫で普通ならば見逃すところだが　昨日以来例の本然のものが出て来てゐるから　なかなか見逃さない



これはあの床下のぢめぢしたところの石の下にでもくぐつてゐようと云ふ奴、色は銀灰、気味きわめて悪し、こ

れも決して吉兆ではない。

鴉や虫の事はともかく今の僕には友を作ることはとてもつらい事なのだ、従つて女の知人友人となると余計うるさい　一人でゐたい、一人でゐたくないだけに尚更一人でゐなければならない、生半可に自分が交際を深めることが出来るなどとうぬぼれると　ろくな事にならない　だから実のところ田中氏ともつきあひたくない。だがこんな事は決して云つてくれてはならない、やがて全く疎遠になる手筈はきめてある。

強く生きたいと思ふ　だが自分以外のものとの交渉に於いて強く生きることは出来ない　それはどうしてもつけやきばだ、すぐに弱いところが出てしまふ。ただこの弱い神経の持主は　ただ自分自身に対するときにのみ強く振舞ふことが出来る。変な奴だと一笑に附して文句なしに田中氏への返答――〃彼奴はどうも近頃忙しいさうだ〃――を引き受けてくれたまへ。七月八日朝、

〈この手紙の「田中千美氏から手紙が来て」以下は『幻の葡萄』第一巻一三二頁に掲載した〉

★1941.7.21.同宛。手紙。墨書。

取急ぎ一筆

金〈兼〉子氏より葡萄到来、但し今朝の事とてお知らせに行く余裕がない　小生これから奈良へ行くにつき　来寺の上適当に処分下されたし

先は御知らせまで　　二十一日午前十時

掃除直後で手がふるへて書けぬ

木の中の如来さま

1987.4.26.　原田　慶

カット　原田道子

花見のにぎわいが静まり、遅咲きのサトザクラが、葉といっしょに葉よりも淡いピンクの花をひそかに咲かせた。カキはうす緑の若葉を、ザクロは枝いっぱいの赤い芽を輝かせ、毎年のことながら、春は何度「きれいやなあ」という言葉をつぶやかせることだろう。

そんな中で、枯れてしまったのだろうかと思うほど、いつまでも空しい曲線を描いていたナツメの枝に、やっとぷつりと小さな緑が一点吹き出した。こまかく折れる線の曲がり角のあたりに、三日ほどで小さな点がいくつも目につくようになった。〃木の中にも如来さま〃という絵を見たことを思い出す。ぷつぷつぷつ……やっとナツメの如来さまが目を覚まされた。ああ枯れてはいなかったのだとほっとする。

毎年春になれば、芽を出すのが当たりまえのように思っていたけれど、昨年から、墓地の隅の大きなムクの木が芽を出さなくなった。だからもう、木々が芽ぐみ小さな葉を広げる時には、祈りたい気持で毎日見つめる。

クスの木が、赤い若葉をそよがせ、毎日パラパラと花を一面に降らせる頃、主人は消防の出初め式のように、高い金属のはしごを九十度に立てて、枝はらいに登って行く。私は下ではしごを支えながら、あまり枝をはらいすぎないで下さいと頼む。この大きなクスを枯らしたくない、かといって枝が茂れば近所の屋根があぶない、だから柔らかい芽の出たところで、枝をはらい落としてしまう。今年も十日ほど前にその作業を終わったのだけれど、ところどころに、ほんのしるしだけ枝を残してもらって、むっつり黙りこんだクスの木に、めずらしくカラ

スが二羽来て止まっていた。

今年は四月初めに、急に気温が上がり、桜が早く咲いたが、畑では冬野菜が伸びすぎ、とうが立ち、葉野菜の値段が突然、倍以上にもはねあがった。八百屋さんが説明してくれたところによると、京都の農家でも、ホウレンソウなどが大きくなりすぎて、業務用にしかならないので値下りし、農家の人は手間と収入とがつり合わないので、伸びすぎたホウレンソウを火焔放射機で焼いてしまった。それで品物が無くなり、いっぺんに高値になってしまったのだという。多少の時期のずれはあっても、例年季節の変わりめには、野菜のはざかい期でこのような現象がおこる。

毎日買い物に出ていた足を止めて、庭を見まわすのもこの季節である。庭にはたくさん食べられる草が芽を出している。種がこぼれてひとりでに生え、たくさん花を咲かせているナタネは花も葉も摘み取って、塩を振り、漬け物にする。ノビルやカンゾウの葉を酢味噌であえる。ヨメナ、タンポポ、ホタルブクロは浸し物やまぜごはんに、ユキノシタ、クコ、コーンフリーは天ぷらに、フキもそろそろ太くなってくる。

干した物はやまかんぴょうとも呼ばれるギボウシを、何とかおいしく食べてみたいと思っているが、今までによく料理できたことがない。あくがのこっているのか、えぐいような感じがしたり、少しねばりのあるようなのがいやだと感じる。事典によると、ギボウシ類は、昔は観賞よりも食用にされることが多かったと考えられ、アマナ（越後）、タキナ（土佐）、イワナ（伊勢）、ウリッパ、ウリュウ（下野）などと呼ばれて、若葉や葉柄をゆでて料理に用いる。アイヌはタチギボウシをウクルキナといい、この茎をよく水洗いした後きざんで、飯や粥

に炊きこんで食べ、また乾して保存した、ということである。

土屋文明の歌集『山下水』には、雑草を求めて食べるということが、よく詠まれていて興味がある。この歌集は昭和二十年五月頃から二十一年にかけての作だというので、食糧難の時代であるが、そのことさえもが美しく感じられるのは、言葉の持つ力だろうか。

踏む土にかおる野びるよはやくのびよ腹減りて待つ吾ならずとも

甘草のつむべき畦を見に出でて三月二十日山鳩を聞く

一日のあたたかき雨に萌えいづる春の諸草次々に食ふ

青き村あした涼しき宿りにて擬宝珠の白き梗を煮たりき

今、飽食の時代に、京都の寺の庭で草を摘んで食べるのは、むしろ安らぎと言わなければならない。

また、オオバコ、カヤツリグサ、ドクダミ、ショウブなどは、薬草として使ってみた。どれも、効果が目に見えるほどのことはないけれども、ドクダミだけは毎年、年中煎じるだけ、摘んで乾燥しておくようにしている。

ビワの葉をもらいにくる人がよくある。あたためたビワの葉の表面から発生する青酸ガスが、皮膚を通して内臓の痛みをやわらげるのだということで、ガンの病人をかかえた人が何度も来られた。二日酔に効くのだという人もあった。昨年の秋には、予備校生だという人が、カキの葉をもらいに来た。春でないと葉は硬くなって、汚れているから何に使うのにも適さないのではないかと思ったが、カキの葉茶にするのだと言う。本で読んで、同じ下宿の人が弱くて、よく病気になるので飲ませてあげようと思ったのだと言った。作り方を知っているのかと思ったら、全く知らない、そのうえ下宿なのでガスも使うことができない。お湯だけはポットにもらうことができるという。カキの葉にお湯をかければよいと思っていたらしい。それなら食べた方がまだよいかもしれない。仕方がないので手伝ってもらってカキの葉茶を作ることにした。シブガキの葉の方がよいのだそうですよ、うちのは甘いカキです、と言ったら、数日して、どこからかシブガキの葉をもらって、きれいに洗って持って来た。これもお茶にしてほしいという。ちょっとしぶい顔をしながら仕方なく引き受けて、乾し上がった頃取りに来るよう言っておいた。きれいに出来上がって、秋の葉でも、こんなに美しいお茶になるものかと思っていたら、雨の降る日、自転車に乗って濡れながらもらいに来た。御所の近くだというから、下宿からここまでは、そんなに遠くはない。「半分もらって下さい。」と言う。うちではいつもじゅうやくを煎じるからカキの葉はいらないと言ったら、丁寧にお礼を言って帰って行った。不思議な人だと思ったが、今頃どこかの大学に入ったのかどうか。

経済学部を受けると言っていたけれど、あれ以来音沙汰がない。

春早くやってくるヒヨドリは、墓に供えた花を食べる。黄色や白のキクの花びらをつついて散らす。花が咲き初めると、レンギョウの茂みにもぐりこんで、首を外に出し、花を食べ散らす。紫のモクレンは、私の見ている前で花びら一枚くらい、またたく間に食べる。時々こちらを気にして、ちらちらよそ見をするので、くちばしの端から花びらのかけらがこぼれ落ちる。たくさん咲いているから、ぜいたくにこぼして、また次の花へ飛び移る。

どういう味がするものかと、すこしちぎって食べてみたら、口に入れると思いがけず、強い香がする、少し苦味があるが、何かの果実ほど食べごたえがあった。

〃如の世界観〃ということを聞いたことがある。如の世界というのは、自然とか宇宙とか呼んでいるものであるが、その中にあるものは、すべてが地水火風の四つの元素からできている。四つの元素からできた、木の如きもの、山の如きもの、人間の如きもの、家の如きものだからすべてが如来であると考えられる。たとえば菜野菜は菜っぱ如来であるが、だれかに食べられて相手を助ける菩薩に変身し、更に食べられたことによってエネルギーを発揮して明王に変身する。その明王が、直接にさまざまな働きをなす。これがほとけの法身、報身、応身なのである。この世界にあるものはすべて、わたしも如来あなたも如来、みんな仏性を持つ。地から養分をもらい雨から水を、太陽から火を、そして空気を呼吸して生きる、これが風である。命尽きて再たもとの四つの元素にもどり宇宙へと返る。それを如去というのだと。つまり来たるが如く、去るが如く、如来如去というのがこれなのだという話であった。

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です
（あらゆる透明な幽霊の複合体）
風景やみんなといっしょに
せはしくせはしく明滅しながら
いかにもたしかにともりつづける
因果交流電燈の
ひとつの青い照明です

という、宮沢賢治の言葉に合わせてみると、いっそうよくわかるような気がする。そして賢治の妹トシが、亡くなる時に、

（うまれでくるたて　こんどはこたにわりやのごとばかりで　くるしまなあよにうまれてくる）

と言ったことに、菩薩となり、明王となって働いた賢治をよく理解し、如の世界を体得していたのだろうと考えられる。

ナツメ如来も、クルミ如来もやがて、美しい葉を広げ花を咲かせ、実を結び、人や虫や毛ものたちなど、たくさんの如来たちが楽しみ養われる。

何も見えなかった土に、次々と小さな草が芽を出す。ジュウニヒトエ、ショウジョウバカマ、ヒトリシズカ、フタリシズカ、ホトトギス、ミヤコワスレ、キリンギク、アマドコロ、ガンピ、スズラン、ハナミョウガ、、よくまあこんなにも美しい名前を持った如来たちだ。今日は午後から風が強くなって、あちらこちら騒がしい。墓の塔婆がカタカタゆれる、墓参用の小さなひしゃくが、音をたてて転がる、ドアがかってにパタンと開く。庭では、蛙がたった一匹だけ、カッカッカッカッと、石を打つような声で叫んでいる。雨が近い、たっぷりと雨が降れば、またたくさんの如来さまが目を覚まされる。

虚空の花 —ランカーの岸辺で（三四）—

原田憲雄

95. 仏慧と大悲によって観察すれば、世界は生起と滅亡を離れ、あたかも虚空の花のようで、有としても無としてもとらえられぬ。＼仏慧と大悲によって観察すれば、一切の存在は幻のようだ。心と意識から遠く離れ、有としても無としてもとらえられぬ。＼仏慧と大悲によって観察すれば、世界はあたかも夢のようだ。断絶と恒常から遠く離れ、有としても無としてもとらえられぬ。＼仏慧と大悲によって観察すれば、煩悩や対象についての無智、人・法のふたつの無我も清浄で、有としても無としてもとらえられぬ。＼仏は入滅されることはなく、涅槃にもまたとどまらぬ。覚るものと覚られるものとを離れ、有と無の二つをともに離れる。＼このように仏を観察すれば、生滅をはなれて寂静であろう。その人は今も後の世にも、汚れに染まること

はあるまい。

魏訳「仏慧大悲観。世間離生滅。猶如虚空花。有無不可得。仏慧大悲観。一切法如幻。遠離心意識。有無不可得。仏慧大悲観。世間猶如夢。遠離於断常。有無不可得。仏慧大悲観。煩悩障智障。二無我清浄。有無不可得。仏不入不滅。涅槃亦不住。離覚所覚法。有無二俱離。若如是観仏。寂静離生滅。彼人今後世。離垢無染取。」

宋訳「世間離生滅。猶如虚空華。智不得有無。而興大悲心。一切法如幻。遠離於心識。智不得有無。而興大悲心。遠離於断常。世間恒如夢。智不得有無。而興大悲心。知人法無我。煩悩及爾炎。常清浄無相。而興大悲心。一切無涅槃。無有涅槃仏。無有仏涅槃。遠離覚所覚。若有若無有。是二悉俱離。牟尼寂静観。是則遠離生。是名為不取。今世後世浄。」

唐訳「世間離生滅。猶如虚空花。智不得有無。而興大悲心。一切法如幻。遠離於心識。智不得有無。而興大悲心。世間恒如夢。遠離於断常。智不得有無。而興大悲心。知人法無我。煩悩及爾炎。常清浄無相。而興大悲心。仏不住涅槃。涅槃不住仏。遠離覚不覚。若有若不有。法身如幻夢。云何可称讃。知無性無生。乃名称讃仏。仏無根境相。不見名見仏。云何於牟尼。而能有讃毀。若見於牟尼。寂静遠離生。是人今後世。離著無所見。」

梵文 Utpādabhaṅgarahito lokaḥ khapuṣpasaṃnibhaḥ, sadasnnopalabdhaste prajñayā kṛpayā ca te(1). Māyopamāḥ sarvadharmāḥ cittavijñānavajitāḥ, sadasannopalabdhaste prajñayā kṛpayā ca te(2). Śāśvatocchedavarjyaśca lokaḥ svapnopamaḥ sadā, sadasannopalabdhaste prajñayā kṛpayā ca te(3). Māyāsvapnasvabhāvasya dharmakāyasya kaḥ stavaḥ, bhāvānāṃ niḥ svabhāvānāṃ yo'nutpādaḥ sa saṃbhāvaḥ(4). Indriyārthavisa-

ṃyuktaṃadṛśyaṃ yasya darśanaṃ, praśaṃsā yadi vā nindā tasyocyeta kathaṃ mune(5). Dharmapudgalanairāt-
ṃyaṃ kleśajñeyaṃ ca te sadā, viśuddhamānimittena prajñayā kṛpayā ca te(6). Na nirvāsi nirvāṇena niry-
āṇaṃ tvayi saṃsthitaṃ, buddhabodhavyarahitaṃ sadasatpakṣavarjitaṃ(7). Ye paśyanti munim śantamevamut
pattivarjitaṃ, te bhonti nirupādānā ihāmutra niraṅjanaḥ(8). （生と滅のうちになく世界は虚空の花のよう
に見え、有としても無としてもとらえられない、智慧により慈悲によりあなたにとっては〈1〉。幻のように一
切の法は心と識とを離れていて、有としても無としてもとらえられない、智慧により慈悲によりあなたにとって
は〈2〉。常住と断滅を離れ世界は夢に似ている何時も、有としても無としてもとらえられない、智慧により慈
悲によりあなたにとっては〈3〉。幻と夢の固有の在り方が存在の集合に対しいかにして賞讃があろうか。固有
の在り方のない諸存在の生ぜざること、これが賞讃である〈4〉。感覚の対象から分離されたもの、見えないこ
とがそれを見ることであるような、かの人に対して賞讃あるいは非難をどうして口にされよう牟尼よ〈5〉。法
と人との無我、煩悩や対象についての無智はあなたには常に、清められている　無相により智慧と慈悲によって
〈6〉。あなたはニルヴァーナによってニルヴァーナしない、ニルヴァーナにとどまらない。知覚と知覚される
もののなかになく、有無の主張を離れている〈7〉。このように牟尼を平静にされたもの生起を離れたものとし
て見る者は、現在と未来においてとらわれることなく汚れることはない〈8〉。）

梵文の〈4〉〈5〉に当る文が宋・魏訳に無く、唐訳には有るが位置がずれている。たぶん唐訳成立の前後に
挿入されたもので、内容から見ても無いほうがいいであろう。

「仏慧」は、prajñāの訳である。jñāは「知覚」で、praは「上、進んだ」の意。普通の知覚を越えた、優れた知覚を指す。「般若」と漢訳されることはよく知られる。『般若心経』や『金剛般若経』（『金剛経』）にいう般若とおなじものである。『楞伽経』と『金剛経』に連絡のあることは、57、〈本稿（三〇）「捨法」〉に引かれた「法でさえ捨てるべきもの、まして非法は」が『金剛経』にも「それだから、如来は、この趣意で、次のようなことばを説かれた――『筏の喩えの法門を知る人は、法をさえも捨てなければならない。まして、法でないものはなおさらである。』と。」（中村・紀野訳）といわれていることで知られよう。

「大悲」は kṛpa の訳語。動詞 kṛp（のために悲しむ）に由来し、anukampa（共感同悲）と通底する。

わたしたちの知覚が自覚されるのは、知るものと知られるものとを分け、知られるものにも図と地とを分けるというように、分節、分別、判別、判断、…要するに「分ける」という人為によってであり、そこから出てきた様々な思考は、さらに組み合わされて、複雑な思考が発達する。思考が見るものは、もと見られたものと同じではない。しかし考える者は、同じだと思っている。幻のような心象は個人においてだけでなく、集団としての社会にもあり、現在のものだけでなく、初めもしれぬ過去から堆積した心象の混合したものが、「世間」とか「世界」とかいわれるものである。その世界のなかでわたしが素直に見た・聞いた・かいだ・味わった・触れた・思った…とすることも、複雑な幻のなかの幻から発出した幻にすぎない。幻にはすぎないが、幻だからといってばかにはできない。『聯燈会要』巻廿三にいう。

福州の玄沙師備禅師、初めて雪峰に閲せし後、諸方を遍歴し知識を参尋せんと欲し、囊を携へ嶺を出づ。脚

指頭を築著し、流血痛楚す。忽然猛省して曰く「是の身は有にあらざるに、痛み何れより来る」と。即ち雪峰にかへる。

少年のころ読んで心うたれ、以来とれないトゲのように刺さったままだ。いま思えば、「是の身」は「有」ではなく幻なればこそ、血が流れ、激しく痛んだのだ。〈この話そのものが幻だ。初めて読んだとき、玄沙師備が何者か、雪峰が何者か、まったく知らなかった。にもかかわらず「脚指頭を築著し…」には生爪を剥ぐ痛みを感じたものだった。わたしの痛みは文章という幻から来たのだった。〉

「有」というものは突き詰めるとあやふやになって「有」とは言い切れなくなってしまう。「無」とは「有」に対して「有」ならざるものを立てて名付けたものだから、「有」があやふやになれば「無」もあやふやになってしまう。そのような「有」と「無」は、対象を見出だそうとする心が作り上げた二辺だと、「仏心品」でいっている。「有」を立てるから、その始めの「発生」を立て、ついで「存続」、さらに「絶滅」を立てる。すべては合理化したい人間の欲望が生みだした幻だ。それらの幻のなかに、もろもろの差別が有る。差別は、幻に過ぎないけれども、人間世界そのものが幻なのだから、差別は差別される人の身を裂き、血を流し、激しい痛みを与える。差別する側が「差別は幻だから気にせぬがよい」と、差別される側にいうとすれば、その人は、幻なればこそ身を裂き、血をながし、激しい痛みをあたえる事実を知らないか、忘れているのだ。

「有」とは何か。「無」とは何か。「発生」「持続」「絶滅」とは何か。…そういう、形而上的話題がしばしば出てきて、読者はあるいは、閑人の閑作業と眉をひそめられたかもしれぬ。だが、現に社会的に差別される人

があり、その人たちが身を裂き、血を流し、激しい痛みにあえいでおり、差別する側がそれを見ても当然とし、平然としているのは、その差別が、目の前の日常の社会生活と関わりなさそうな〈形而上学〉に支えられているからである。『楞伽経』は、このことに気づき、その〈形而上学〉の虚妄を突き崩さないかぎり、差別はつねに新しい装いを凝らして登場することを覚り、差別される人々の側にもこの〈形而上学〉がそっとすべりこみ「被差別」を武器にして人を差別するといった事例もないではないことを知り、差別は差別の出てくる根源を突き詰めて、その根本のところを徹底的に明らかにしてしまわなければ、消したつもりの火が又くすぶり出すように、いつまでたっても無くならない、ということを主題に択んで編纂された経典だと察せられる。だから、一見形而上的な話題も、避けるわけにはいかなかった。

仏慧によって観察するとは、人が「存在」とし「法」とするところの一切が「有」でもなく「無」でもなく、幻のようなものであることを、徹底的に観察することであり、幻のようなそれらをあたかも確実で永久的に特質を持続するものであるかのように言うところの、神学や哲学の虚妄をあばくことなのだ。

大悲によって観察するとは、人間とは幻のなかで幻をつむぎながら生きる幻であることを知り、その幻の悲しみを共に悲しみ、その喜びを共に喜び、幻の身から流れ出る血を押え、激しい傷みを止めるために努力することをさすのであろう。

絶対の真理を「沈黙の如来」というのは味わい深い。絶対の真理は人間に話しかける必要はないのだから。必要があるのは人間の側である。しかし、幻である人間からは「沈黙の如来」である絶対の真理と語る術はなく、

到る方法はない。

ただ、幻の世界に人間として生き、己の幻であることに気附く少数の人がおり、かれらは「覚った人」ブッダとよばれる。彼らはみずから幻であるけれども、幻であることを知っていることにおいて空であり、その空に沈黙の如来が映っているのであろう。映ってはいても、みずから幻であるから、幻である人間の悲しみは分かっており、沈黙の如来の絶対の真理性は知っていても、自らは沈黙の如来とならず即ちニルヴァーナに入らず、幻として、肉体を持つ人間として、人間の、世界の、幻のようなものであることを説き続ける。そのようなブッダを化身仏というが、化身こそアヴァターラ『入楞伽経』の「入」と同義であった。

ランカーに「入」った世尊は「夜叉」の王ラーヴァナとの問答で、差別と、差別を生み出す分別を解体した。ランカーでは差別も分別も消滅したとしても、ランカー以外の世界には差別も分別も健在で、その世界からはランカーは相変わらず夜叉の国である。ランカーではすでにマハーマティとして菩薩である人も、世間からは相も変らぬ夜叉王で、世間から差別と分別が消滅するまで、おなじ夜叉の仮面をかぶって問いを投げつづけなければならない。仮面をかぶることもアヴァターラだから、これまた「入楞伽」と同義である。

独り合点の長談義だったが、これを結論としていいだろうか。魏訳『楞伽経』は一巻の半ばを了えただけで、なお九巻をあます。その翻訳もわたしの仕事とすべきだし、李賀の詩との関わりについてもはっきり書かねばと思うが、別の機会にゆずり、この稿を閉じる。読者各位の寛容に対し深謝いたします。　（1987.4.28.）

※前号正誤　二二頁一一行　sattva - pracara →sattva - pracāraḥ